

千葉県議会議員 ふじしろ政夫 と共に県政・市政を変えよう！

発行 ふじしろ政夫

〒273-0122 鎌ヶ谷市東初富5-24-50

Eメール masao.fujishiro@zc.wakwak.com

政務調査報告ニュース 2014年5月号

TEL & FAX 047-445-9144

ホームページ <http://e-kamagaya.com/>

南相馬市・浪江町の今……

現地調査



《桜井南相馬市長と語る》

先の市長選で再選された桜井市長は今年度の目標として、①診療所を整え②商店が店を開ける③工場・事務所への助成④仮設住宅から戻れるようにする。と語りました。

避難指示解除準備区域から解除された小高地域を一刻も早く復旧させ“美しい小高、花畑の小高”にしたいと。脱原発首長会議(97自治体参加)で中心となって活動する桜井市長から、南相馬市の再生可能エネルギー政策を聞きました。



「2030年にすべて再生

可能エネルギーでまかなえるよう。今、太陽光発電については民間の家屋には250軒/年助成、H26年度にすべての公共施設に太陽光発電を」と方向性を語りました。そして震災被害地域の集団移転の55軒にすべて太陽光発電を設置。スマートシティを目指しているとのこと。170hの被災地には太陽光発電のパネルを設置する予定です。「東電からいかに自立するかが重要」と語りました。

更に「太陽光、水素エネルギーへの転換は目前です」とはっきりと歩むべき道を示しました。“国のエネルギー基本計画=原発は重要なベースロード電源”に対しては厳しく批判。そして「政治家は、政治生命にかけて時代転換のときだからこそ、どういう地域をつくり出し、どういうことをやるべきかを示すべき」と脱原発へ大きく踏み出す政治家の役割を指摘。又、地震・津波・原発事故後の中では、“お金では

解決できない課題がある”ことも指摘しました。「『あたりまえの生業をどうもどすか?』の課題を実現するのが政治の役割であり、それ故社会構造を変えていく必要があるのです。……だから原発に頼らない街をつくる為、東電と闘い続けるのです」と現状への厳しい批判と新しい南相馬市の街づくりの目標を語ってくれました。

《浪江町で渡辺副町長と……》

原発から7km位の位置に浪江町役場があります。役場で渡辺文星副町長から浪江町の現状についてお聞きしました。

浪江町は、帰還困難区域・居住制限区域・避難指示解除準備区域です。渡辺副町長は地震津波の自然災害と原発事故の人的災害の複合災害をうけた浪江町の苦勞を語りました。原発事故の為、津波で被災された人々を救助に行けなかった悔しさを。

又、原発立地の大熊町・双葉町・富岡町には情報が入っていたが、原発から5kmの浪江町には何の連絡も来なかったこと。それ故住民を最も線量の高い津島地区へ避難させたことの無念を語ってくれました。

通行許可所を頂き海岸線へ。請戸地区は時間が2011年3・11で止まっていました。破壊されたままです。それなのに「再稼働だ」という国。副町長は「国は浪江の住民を棄民しているとか思えない」と原発事故が風化している国会・政府内の状況を厳しく批判しました。



レイテ島の医学生から学んだこと

佐久総合病院 色平哲郎医師

「私たちを支えてくれた地域の人々のためにすべてを捧げたい」

昨年11月の台風30号で壊滅的な被害を受けたフィリピン・レイテ島を2月中旬訪問した。やっと復旧作業が始まった被災現場で聞いた20代前半の若い医学生らの言葉に胸が震えた。

▼台風の爪痕…レイテ島パロにあるフィリピン大学医学部レイテ分校(SHS)という小さな医学校の学生は地方自治体の推薦で選ばれ、入学後は助産師と看護師の資格取得を義務づけられる。その後地方の医療機関で保健・医療活動の経験を経て、初めて医学コースに進級できる教育制度を採用している。医師になる前から地域医療の現場で、自分たちにどれほど大きな期待が寄せられているかを知る卒業生の多くは、収入の多い海外の医療機関への就職の道を選ばず、進んで国内の地方医療機関の勤務を望む。医療従事者の海外流出が深刻化する現実の中で、私はSHSを「フィリピンの希望」と呼んできた。

その医学校が台風で壊滅したと聞き、同校と長い協力関係をもつ「佐久総合病院(長野県佐久市)」の若手医師らと現場に向かった。被災から3ヶ月たったのに、州都タクロバンの空港ビルの天井は落ち壁や窓は壊れたままだった。州都を離れると台風の爪痕はより鮮明になった。幹線道路の周辺には、国際機関が配給したブルーシートやテントで暮らす人々があふれていた。教室を失った小学校ではテントを使った授業が始まっていたが、子供たちの机にはノートが見当たらなかった。

2006年のレイテ島取材で知り合ったSHS出身の女性医師ネミア・サングランノさん(53歳)が勤務する、ダガミという町の診療所に行ってみた。屋根と壁の仮修理が終わった診療所には、100人以上の患者が列をつくっていた。赤ちゃんを抱いた主婦、メルタ・ソリスさん(39歳)は「台風の時この子は私のお腹にいた。被災してすべてを失ったが、この子は無事に生まれた。この診療所と医師のおかげだ」と語った。

サングランノ医師は「機材も薬も足りない。でも今はこれで頑張る」と胸にかけた聴診器をかざして見

せた。

▼支援とは…SHSは、屋根が飛び窓も扉もない無残な姿になっていた。木造2階建ての本館内部には、ボロボロになったカルテや本が散乱していた。教員と学生たちの姿はなかった。

タクロバン市内にある別の大学の敷地内で、SHSの仮設校舎と寄宿舎の建設作業に従事していたからだ。だが、パロの本校の敷地は地元自治体が返還を求めている。彼らが安心して勉強に取り組むことができる新校舎建設のメドは、まだ立っていないのが実情だ。

そんな厳しい状況におかれた学生たちに「今の思い」を問いかけたときに出てきたのが、冒頭で紹介した「地域の人々のために、すべてを捧げたい」という言葉だった。

なぜSHSの若者たちは、すべてを失った絶望的な状況の中でも人々を救おうという強い使命感を維持できるのか。その背景にあるのは、学校と地域が長い時間をかけて培ってきた強い信頼関係だ。日本からの資金提供や支援は重要だが、逆に使命感をもったSHSの学生のような若者を育て、地域との信頼関係をつくる秘訣をSHSから日本の医療教育機関へ“技術移転”する必要があるのではないか。

先進国から途上国への一方的な支援は、やがて人々の記憶から消えていく。だが、相互に学び合う協力関係をつくることで互いに本当の感謝の心が持てるようになる。また一つ大事なことを、アジアの隣人たちから学んだ。

鎌ヶ谷小前に貯留池を

南初富5丁目、集中豪雨のときにはいつも道路冠水「胸までできてしまう」と地元住民から苦情が寄せられています。鎌ヶ谷市は鎌ヶ谷小前の土地600㎡に965tの貯留池を建設、事業費1億8532万円。時間雨量30mmには対応可。しかし50mmでは2800tの水を処理しなければなりません。市は今後1835t分の貯留池か浸透施設を考えているところです。

お知らせ

5/25(日) 13:00~総合福祉保健センター6階

*法律弁護士無料相談 要予約:ふじしろ迄

5/24(土)・6/28(土)・7/19(土)13:00~

